



MUSIC PEN CLUB, JAPAN

2022 年度 第 35 回ミュージック・ペンクラブ音楽賞決定！！

《クラシック》

1. ソロ・アーティスト部門 藤田真央（ピアノ）
2. 室内楽・合唱部門 ラ・フォンテヴェルデ
3. オペラ・オーケストラ部門 新国立劇場
4. 現代音楽部門 神奈川県民ホール「フィリップ・グラス《浜辺のアインシュタイン》」
5. 研究評論・出版部門 吉原真里『親愛なるレニー
レナード・バーンスタインと戦後日本の物語』（アルテスパブリッシング）
6. 功労賞 青澤唯夫（音楽評論）

《ポピュラー》

1. 最優秀作品賞 海野雅威『Get My Mojo Back』
2. イベント企画賞 The 30th ハママツ・ジャズ・ウィーク/
ヤマハ・ジャズ・フェスティバル
(主催：浜松市、静岡新聞社・静岡放送、ヤマハ株式会社 他)
3. 新人賞 リナ・サワヤマ
4. 著作出版物賞 川添象郎『象の記憶』（DU BOOKS）
5. 功労賞 小林克也
6. インターナショナル部門 ブルーノ・マーズ

《オーディオ》

1. 技術開発部門 エソテリック/アナログプレーヤー/GrandiosoT1
2. 録音作品部門 EVOSOUND/ボブ・ジェームス
「フィール・ライク・メイキング・ライヴ！」
3. 著作出版物賞 佐伯多門『スピーカー技術の 100 年 I~IV』（誠文堂新光社）
4. 特別功労賞 ラックスマン/アナログプレーヤー/PD-191A

授賞式

2023 年 4 月 20 日(木) 14:00-17:00 / 文京区民センター2A 室

〒112-8555 東京都文京区本郷 4-15-14 電話：03-3814-6731

※例年使用していた文京シビックセンタースカイホールは現在貸出中止のため、変更となりました。

また時節柄、事前に登録した関係者のみで行ないます。

2022 年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞に関するお問い合わせは下記までお願いします。

一般社団法人ミュージック・ペンクラブ・ジャパン <http://www.musicpenclub.com>

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 1 丁目 34 番 5 号 いちご東池袋ビル 6 階

MPCJ 事務局 080-8051-6652 / mail1@musicpenclub.com

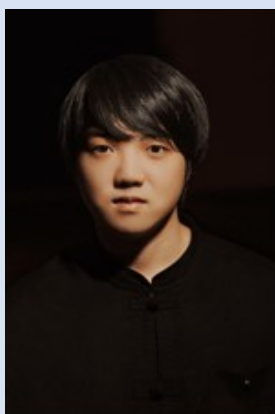
2022年度 第35回ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞者一覧

Comments & Profile

ミュージック・ペンクラブ音楽賞とは、少数の選考委員が選ぶ従来型の賞とは異なり、ミュージック・ペンクラブ・ジャパン約 150 名の全会員による自主投票によって選定されます。授賞対象は、基本的に、日本でその年に公開または発表された音楽界の全プロダクツやイベントです。それは録音録画の形で発売されたものの他、公演、著作、技術開発を含みます。選考基準は、当会の「クラシック」「ポピュラー」「オーディオ」の分野ごとに設けられ、各分野で授賞対象者・団体をノミネートし、最終的に全会員の分野を超えた投票によって決定されます。

《クラシック》 ソロ・アーティスト部門

藤田真央（ピアノ） Mao Fujita



©Dovile Sermokas

すでに広範なレパートリーをもつ藤田真央だが、2022年は、彼の「モーツァルトの年」として記憶されよう。ソニー・クラシカルに録音したピアノ・ソナタ全曲を一挙にリリースし、千変万化の色と表情をみせるその鮮烈な解釈で、世界中の音楽ファンを魅了。また、東京、名古屋、京都で進めてきたソナタ全曲演奏会も佳境を迎え（2023年2月完結）、創造性あふれる即興精神をCDとはまた違ったかたちで発揮した。このほか同年は、ミラノ、ルツェルン、ライブツィヒなど世界の檜舞台を多様な演目を携え席卷、「新人」段階から大飛躍を遂げた年ともなった。周到でありながら遊んでいるようにも見える自由闊達な演奏は、私たち書き手にも大きな刺激である。よって本賞を贈りたい。（船木篤也）

プロフィール 藤田真央

2019年チャイコフスキー国際コンクールで第2位を受賞。ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭、ラ・ロック＝ダンテロン国際ピアノフェスティバル、ツィナンダリ音楽祭など主要な音楽祭へ定期的に出演。2023年1月カーネギー・ホールにてホール主催のソロ・リサイタルデビューを果たす。2021年11月ソニークラシカル・インターナショナルと専属レコーディングのマルチアルバム契約を締結。2021年ヴェルビエ音楽祭でのモーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲演奏が好評を博し、2022年10月モーツァルト：ピアノ・ソナタ全曲集をリリース。

室内楽・合唱部門



ラ・フォンテヴェルデ La Fonteverde

イタリアのマドリガーレを中心的なレパートリーとする声楽アンサンブルとして、結成時からイタリア語の歌詞と音楽の関係を徹底的に掘り下げた解釈と卓越したアンサンブル力で注目を集め、定期的なコンサート活動やCD録音の優れた演奏を通して、日本の聴衆に16～17世紀初頭の声楽アンサンブル作品を聴く楽しみと真の魅力を伝え続けてきた。とりわけ、10年の歳月をかけてモンテヴェルディのマドリガーレに取り組み、全曲演奏会と全曲録音を行なったことは特筆に値する。その演奏の質は国際的な水準に照らしても第一級。海外の評価も高く、昨年結成20年を迎え、今後ますますの活動が期待される。

(那須田務)

プロフィール ラ・フォンテヴェルデ

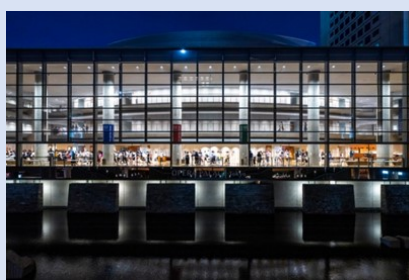
2002年に結成された日本では希少なマドリガーレ・アンサンブル。16～17世紀初頭イタリアのマドリガーレを中心に、本質である『言葉と音楽の融合』を目指す。定期的なコンサートやセミナーなど、着実な活動を展開。ソリストとしても活躍中の実力派メンバーによって構成されている。2013年に、C.モンテヴェルディのマドリガーレ集全9巻の全曲演奏と録音のプロジェクトを開始し2018年に完結。アルテ・デラルコレーベルによるCDは2022年に最終巻をリリース。レコード芸術誌において全て特選盤、準特選盤に選ばれている。2018年9月にクロアチアの「ヴァラジュディン・バロック音楽フェスティバル」に出演し、最優秀演奏賞を獲得した。

オペラ・オーケストラ部門

新国立劇場 New National Theatre Tokyo



©堀田力丸



©堀田力丸

開場25周年を迎えた2022年は、5月にグルック《オルフェオとエウリディーチェ》、7月にドビュッシー《ペレアスとメリザンド》、10月にヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》、11月にムソルグスキー《ボリス・ゴドゥノフ》と、日本の団体では上演が稀な演目の新制作に続けて挑み、意欲的・衝撃的な舞台を展開。特にオペラ芸術監督・大野和士の意志を映すバロック&ロシア・オペラで多大な成果をあげた。

また「ペレアス〜」「ボリス〜」で高精度の音楽を創造した大野の指揮も特筆される。さらには、レパートリー上演のクオリティ・アップ、在京オーケストラ公演等での新国立劇場合唱団の活躍も光っていた。よって、オペラ芸術監督・大野和士ともども当賞を授賞したい。(柴田克彦)

プロフィール 新国立劇場

日本唯一の現代舞台芸術のための国立劇場として、1997年10月に開場。オペラ、バレエ、ダンス、演劇公演を制作・上演すると共に、芸術家の研修等の事業を行う。青少年向けの普及公演、全国各地での公演、国内外の劇場との提携、近年では公演映像の配信なども積極的に行っている。オペラ部門は2018年より大野和士が芸術監督に就任、世界の主要歌劇場と比肩する水準のオペラを年間およそ10本上演している。スタンダードな名作から現代オペラまで多彩なレパートリーを蓄積し、日本人作曲家によるオペラの上演にも意欲的に取り組む。最近では《紫苑物語》(インターナショナルオペラアワード新作部門ノミネート)、《アルマゲドンの夢》等の新作オペラも高い評価を得る。公演の核となる新国立劇場合唱団は2018年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞を受賞、内外の音楽関係者から賞賛を浴びている。

現代音楽部門



神奈川県民ホール「フィリップ・グラス《浜辺のアインシュタイン》」

©加藤甫



©Koh Okabe

神奈川県民ホール

「フィリップ・グラス《浜辺のアインシュタイン》」 Kanagawa Kennmin Hall

1992年の日本初演以来30年ぶりの《浜辺のアインシュタイン》(ロバート・ウィルソン&フィリップ・グラス)再演を強力に推し進めたのは、2000年から神奈川芸術文化財団の芸術総監督を務めてきた作曲家の一柳慧。前衛の一線を走り続けた一柳は2023年10月8日の初日前夜に急逝、財団設立30周年企画の第1作が奇しくも追悼公演の色彩を帯びた。演出と振付を担った平原慎太郎は、グラスの音楽の波動を見事に現代の日本の舞踊劇へと置き換えた。ダンサーの強烈な存在感、俳優(田中要次と松雪泰子)、ヴァイオリニスト(辻彩奈)のソロと若手中心の器楽チーム、東京混声合唱団をキハラ良尚の指揮が素晴らしい弾力性と共にまとめ上げ、作品に全く新しい生命を吹き込んだ。(池田卓夫)

プロフィール 神奈川県民ホール

1975年に横浜港を望む海岸通りに開館。全国屈指の大型文化施設として知られ、オペラやバレエ公演の自主制作、世界標準の先鋭的なコンテンポラリー・ダンス公演の招聘、若手美術家の企画展などを通じ、芸術文化の創造と振興につとめている。94年より公益財団法人神奈川芸術文化財団が管理運営を担う。2000年からは作曲家・ピアニストの一柳慧を芸術総監督に迎え、一柳の「常に現代の視点を持ち、自由な発想で取り組もう」という方針のもと、オペラ《愛の白夜》や、ジャンルを横断する「アート・コンプレックス」シリーズ、Composer、Classic、Contemporary がクロスする室内楽シリーズ「C×C (シー・バイ・シー)」などを企画、上演してきている。今回の受賞公演も、一柳の方針の下で企画されたものである。

研究評論・出版部門

吉原真里『親愛なるレニー レナード・バーンスタインと戦後日本の物語』

(アルテスパブリッシング) Mari Yoshihara



本書は、レナード・バーンスタインと深く交流した、二人の日本人男女の書簡集をもとに、20世紀アメリカを代表する指揮者・作曲家と日本との関係を描いていくものである。時間をかけた入念なリサーチにより、著者はミクロな個人間の交遊に、マクロな歴史を巧みに織りあわせた。親密な私信の背景に、敗戦後から高度経済成長、バブル期までの日本とアメリカの社会と音楽界の動きが浮かび上がり、バーンスタインという存在の大きさと深い人間愛を、公私の両面で実感させる。曝露趣味に陥らない、慎重で謙虚な取材姿勢と記述スタイルもまことに好ましい。この筆致と構成の妙を称えるべく、音楽賞を贈るものである。(山崎浩太郎)

プロフィール 吉原真里

1968年ニューヨーク生まれ。東京大学教養学部卒、米国ブラウン大学博士号取得。ハワイ大学アメリカ研究学部教授。専門はアメリカ文化史、アメリカ＝アジア関係史、ジェンダー研究など。著書に『アメリカの大学院で成功する方法』『ドット・コム・ラヴァーズ』(以上中公新書)、『性愛英語の基礎知識』(新潮新書)、『ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール』『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか?』(以上アルテスパブリッシング)、共編著に『現代アメリカのキーワード』(中公新書)、共著に『私たちが声を上げるとき』(共著、集英社新書)、そのほか英文著書多数。

功労賞



青澤唯夫（音楽評論） Tadao Aosawa

2022年9月6日に80歳で逝去した青澤唯夫氏は1975年から音楽雑誌各誌の演奏会評執筆者を務め、的確かつ格調高い批評文で演奏家に温かな声援を贈り、時には敢えて苦言も呈してきた。その一方、『名ピアニストの世界』『ショパンを弾く』(以上春秋社)、『ショパンその生涯』『ショパンその全作品』(以上芸術現代社)など、ピアニスト、及びショパンに関する労作を上梓して、ピアノ音楽ファンに上質の情報を提供し、読者の知的欲求に応えてきた。また、ミュージック・ペンクラブ・ジャパンの会長としても会の活動の活性化に心を砕き、音楽評論界の発展に尽力した。これらの多大な功により、推薦委員全員一致で功労賞の贈呈が決まった。

(萩谷由喜子)

プロフィール 青澤唯夫

1941年生まれ。学生時代はフランス文学、ラテン語を学んだが、傍ら作曲、音楽理論を学び、ピアノ教師を経て音楽史研究、評論活動に入る。1973年、共同通信社に入社。音楽専門誌や新聞に演奏会評、レコード・CD評、特集、エッセイ、曲目解説などを寄稿。日本ショパン協会理事、浜松国際ピアノコンクール運営委員。ミュージック・ペンクラブ・ジャパン会長、日本ベートーヴェンクライス理事、日本イザイ協会顧問などを歴任。代表的な著作に、『ショパン—優雅なる激情』、『ショパン その生涯』、『ショパン その全作品』(以上、芸術現代社)、『名ピアニストの世界』、『名指揮者との対話』、『ショパンを弾く—名演奏家たちの足跡』(以上、春秋社)、『鳴らす力 聴く力』(貝山知弘氏との共著、音楽之友社)。

《ポピュラー》

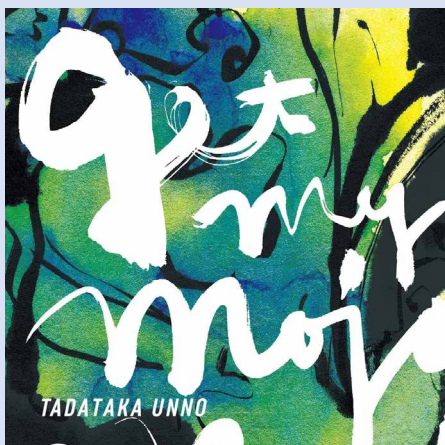
最優秀作品賞

海野雅威『Get My Mojo Back』

(ユニバーサルミュージック/UCCJ2204)



©John Abbott



海野雅威はニューヨークで活動続けるピアニスト。2020年秋にコロナウィルス蔓延によるアジア人へのヘイトクライムによってニューヨークの地下鉄構内で暴行に遭い、ピアニスト生命を絶たれる程の重傷を負いながらも、強い精神力とリハビリによって復活をとげた。「Get My Mojo Back」は復帰後の初アルバム。事件を差し置いても第一級の素晴らしい作品であるが、或いはあのような事件に巻き込まれたからこそその表現の芯と、“負けないぞ”という不屈さが加わっているように思える。現代ニューヨーク・ジャズのハードさとメロディックな繊細さ、ヒューマンな優しさといったものがいっばいに詰められていて、それぞれのバランスも最高だ。(岡崎正通)

プロフィール 海野雅威

4歳からピアノを弾き始め、9歳でジャズピアノを始める。東京藝大在学中の18歳からミュージシャンとして活動を始め、2008年にニューヨーク移住。ハンク・ジョーンズやジミー・コブなど数々のジャズ・レジェンドに愛され、ロイ・ハーグローヴ・クインテットで日本人初、最後のレギュラー・メンバーとなった。2020年9月にアジア人ヘイトクライムの犠牲とな

ったが、不屈の精神と懸命なリハビリにより見事復活。最新アルバム『Get My Mojo Back』は生命力と歡びに満ちた作品に仕上がっている。海野にとってジャズと出会うきっかけとなったピアニスト、オスカー・ピーターソンもかつて在籍した名門レーベル“ヴァーヴ”からのリリース。

イベント企画賞

The 30th ハママツ・ジャズ・ウィーク/ヤマハ・ジャズ・フェスティバル

(主催：浜松市、静岡新聞社・静岡放送、ヤマハ株式会社 他)



ハママツ・ジャズ・ウィークは、毎年10月、浜松で9日間、他では類を見ない規模で展開する一大ジャズ・イベント。1992年にスタートし、30年に及ぶ極めて意義深い活動と歴史的価値を高く評価する。街全体がステージとなり、プロ、アマチュア、学生など多彩なプログラムで、浜松

の音楽文化発展に貢献してきた。/ヤマハ・ジャズ・フェスティバルは、“ここにしかないめぐり合い”を合言葉に、国内外で活躍するアーティストたちが数々の感動を生んできた。2022年は、ジャズ界の二刀流・曾根麻央、圧倒的な表現力を持つサラ・オレイン、日本ジャズ界の発展に尽くした原信夫へ捧ぐトリビュート・ビッグバンドが出演し、魅力的なステージを展開した。(高木信哉)

プロフィール

浜松市が推進する音楽都市づくり事業の一環として1992年にスタート。世代を問わず楽しめる「ジャズ」をテーマに、官民一体となり企画運営する地域文化イベントとして毎年10月に開催、本年度で30回目を迎えた。9日間の期間中は、学生ビッグバンドの祭典やファミリー向けイベント、小中学校で行う出前コンサートのほか、評論家によるトークショーや、街角を舞台にしたストリートジャズなど、「大衆性・芸術性・多様性」を表現する多彩なプログラムを展開。最終日のヤマハ ジャズ フェスティバルは、新進気鋭からベテラン、人気歌手など、国内外から超一流アーティストを招聘し、独自性・話題性のあるステージで“ここでしかない、めぐり合い”を実現。

新人賞



©Thurstan Redding

リナ・サワヤマ

新潟出身、4歳でイギリスに渡ったリナ・サワヤマ(33歳)。魅力的なアルト・ヴォイスに加えて、完璧なピッチそして何よりも内在するリズム感は天府の才能と言えます。ビートを押し付けるのではなく歌詞の一つ一つに内在したリズムが聴くものを歌に引き入れます。初めて聴いたとき日本人と思えないのは英語が非常に上手いだけではなく彼女のリズム感に起因しているのです。宇多田ヒカル、椎名林檎、ブリトニー・スピアーズ、マライヤ、ビヨンセ、レディー・ガガ、テイラー

・スウィフトと言ったアーティストから影響を受けたと言っていますが注目されるのはそれらのアーティストの要素をあえて自分の曲に取り入れる手法で彼女なりのオリジナリティを作っているところです。歌詞は英語で書かれていますが、宇多田や椎名の影響を感じられます。ライブでは見事なダンスに加えてありのままに生きるという彼女のメッセージ(ジェンダー、LGBTQ)も発信、国際規格のアーティストとして注目しています。(朝妻一郎)

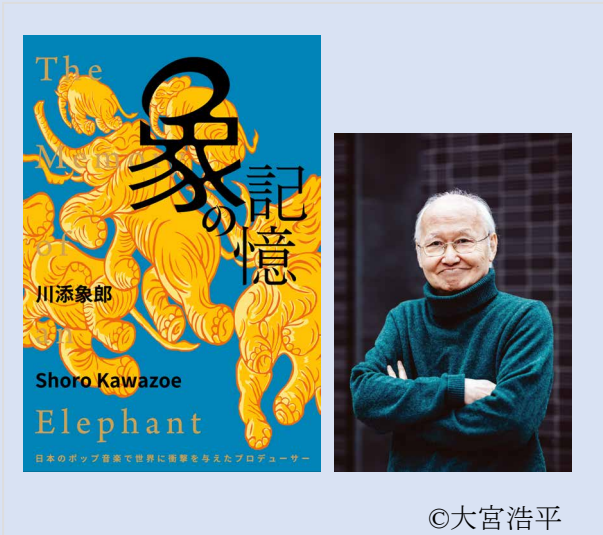
プロフィール リナ・サワヤマ

新潟県出身の日本人シンガー・ソングライター。デビュー・アルバム『SAWAYAMA』(2020)が海外主要メディアで絶賛され、その音楽性にはレディー・ガガやエルトン・ジョンからもラブコールが(両者とコラボも)。コーチェラ2022でのパフォーマンスは日本でも話題となり、Twitterトレンド入りに。最新アルバムが全英初登場3位を獲得し、日本人として史上最高記録という快挙を達成した。

現在はイギリス・ロンドンが拠点。ニューズウィークの「世界が尊敬する日本人 100」に選出されている。また、2023年には女優として、大人気映画シリーズ『ジョン・ウィック』第4作目への出演が決定している。

著作出版物賞

川添象郎『象の記憶』(DU BOOKS)



もうこれほど破天荒な音楽プロデューサーは出てこないのではないかと。日本のポップスにおける、およそ革命的なこと、前衛的なことをやり尽くした川添象郎の軌跡を本人が辿るこの回想記録は無類の面白さで読む者を魅了する。1960年代、すべてのカウンター・カルチャーが産声をあげるニューヨークやパリでのギタリスト武者修行。70年代、伝説の『ヘアー』日本公演にはじまり、アルファ・レコードの立ち上げやユーミンのプロデュース。さらにYMO世界ツアーの舞台裏など、エポック・メイキングな出来事の背後に必ず川添の存在があることに驚愕すら感じる。音楽をプロデュースするとはどういうことなのか、その本質に迫る画期的な名著。(ヒロ宗和)

プロフィール

1941年東京生まれ。父はレストラン『キャンティ』創業者の川添浩史。生母はピアニストの原智恵子。60年に渡米しフラメンコ・ギタリストとして世界中を旅し、帰国後はミュージカル『ヘアー』をはじめ数々の音楽と演劇のプロデュースに着手。村井邦彦とアルファ・レコードを創設し、荒井由実、サーカスなど洗練されたシティポップを世に送り出し、特にYMOのプロジェクトでは、世界ツアーを成功に導き注目を集める。近年は再び音楽プロデュースに復帰、2008年にリリースされた青山テルマの「そばにいるね」は日本で最も売れたシングルとしてギネス世界記録に認定。2011年のプロデュース作、ふくい舞の「いくたびの櫻」はレコード大賞作詞賞を受賞。

功労賞



小林克也 (DJ、アーティスト)

小林克也氏は、長きにわたる DJ などによる活動で、良質の洋楽作品を多数紹介して、日本の音楽ファンの視野と裾野を大きく広げた。インターネットがまだない時代、私たちは、小林克也氏を通じて、アメリカンポップスや世界中の洋楽を勉強した。毎週、小林氏の番組を聴くのが、楽しかった。今も昔も。まさに音楽の伝道師のような貴重な存在である。海外アーティストとのダイレクト・インタビューには、目を見張った。小林氏の歩み自体が、多大な功績といえる。今も現役で、流暢でカッコ良い英語とわかりやすい語りが絶妙である。変化の激しいポピュラー・ミュージックの世界で、最高の DJ として今も第一線で案内役を果たしていることは尊敬に値する。(高木信哉)

プロフィール 小林克也

広島県福山市出身。1941年(昭和16年)3月27日生まれ慶応大学在学中よりコンサート司会、DJを始め、DJ、俳優、ミュージシャンとして活動。毎週金曜は9時間の生放送(FUNKY FRIDAY)をこなし、ラジオ聴取率もNO. 1。名実共に第一人者の責任を果たしている。

インターナショナル部門

ブルーノ・マーズ



©John Esparza

人呼んで“音楽界の至宝”。2010年のアルバム・デビュー以来、天井知らずの活躍を続けているが、2022年はアンダーソン・パークと組んだ“シルク・ソニック”でグラミー賞「最優秀レコード」「最優秀楽曲」「最優秀 R&B ソング」「最優秀 R&B パフォーマンス」を受賞。秋には約4年ぶりに来日、東京ドームや京セラドームをソールドアウトにしたことも記憶に新しい。声のカッコよさ、楽曲の親しみやすさ、いでたちの“華”。一挙一動が話題を集めてやまない、時代のヒーローだ。

(原田和典)

プロフィール ブルーノ・マーズ

ニューヨーク・ブルックリン出身でプエルトリコ人と東欧系ユダヤ人のハーフである父親、フィリピン出身の母親の間に、1985年ハワイ州ホノルルで誕生。ロサンゼルスで本格的な音楽活動を開始し、3枚のスタジオ・ソロ・アルバムを発表。2021年にはアンダーソン・パークとのコラボレーション・プロジェクト“シルク・ソニック”も発足させた。「最も多くのグラミー賞を獲得したアーティスト」、および「一晩で最も多くのグラミー賞を獲得したアーティスト」のひとり。

《オーディオ》

技術開発部門



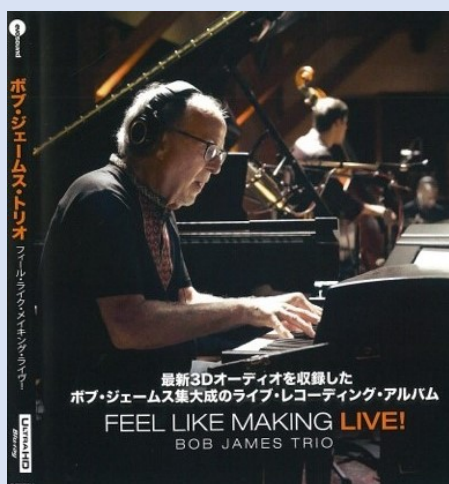
エソテリック / アナログプレーヤー

グランディオオーソ GrandiosoT1

マグネフロート方式のプラッターをマグネティックドライバーで回転させる ESOTERIC MagneDrive System による、完全非接触ターンテーブル。軸受けの摩擦抵抗を大幅に低減した。メインユニット、モーターユニット、電源部による 3 ピース構成を採用、高品位 VCXO 搭載モータードライバーで正確な回転をサポートするばかりでなく、高精度マスタークロック Grandioso G1X との 10MHz クロックシンクを実現。前面のマイクロメーターにより、マグネティックドライバーの伝達トルクを変えることで、音色の微調整が可能と、代表的 20 世紀メディアのアナログレコード再生を 21 世紀的に表現してみせた。発案、特許取得、実用化まで実に 5 年を要して完成。エソテリックブランド 35 周年を記念して発売された。

(大橋伸太郎)

録音作品部門



EVOSOUND / ボブ・ジェームス Bob James

“Feel Like Makin’ Live!”

MQA-CD のみならず、DVD、SACD/マルチチャンネル、ハイレゾ配信、ストリーミング、UHD ブルーレイ、さらに 2 枚組重量盤 LP と、本作はまさしく現代の多様なオーディオスタイルに相応しいクロスメディアにてリリースされた稀有なアルバムである。もちろん演奏内容は折り紙付きだし、一発録りを基本としたスタジオライブ収録のサウンドも非常にハイレベルなクオリティ。瑞々しいピアノの音色、アコースティックベースの豊かな胴鳴り、抜けの良いドラムの一打…。いずれも鮮烈な響きのリアリズムである。御年 80 歳過ぎのボブ・ジェームスの衰えを知らない演奏意欲に頭の下がる思いがすると共に、それをバックアップした制作スタッフの気概と企画力にも敬意を表したい。(小原由夫)

著作出版物賞

佐伯多門『スピーカー技術の100年 I~IV』(誠文堂新光社)



ケログとライスによってダイナミック型のスピーカーが発明されてから100年が経つ。佐伯多門さんが執筆された「スピーカー技術の100年」はその節目に書き下ろされた4冊からなる大作である。佐伯さんは三菱電機に入社後ダイヤトーンスピーカーの開発に携わってきたエンジニアだが、本著にはご自身の知見はもとより、膨大な資料を読み解き、さらには貴重な写真がふんだんに盛り込まれている点も刮目に値する。

今では携帯電話から家電製品まで、あらゆるものがスピーカーのお世話になっているが、オーディオの歴史をこの分野ともっとも密接にかかわってきたスピーカーから俯瞰することで進化の過程を解き明かしている点も大変興味深い。(潮晴男)

特別功労賞

ラックスマン / アナログプレーヤー PD-191A



国内アナログプレーヤー不毛の時期に、ラックスマンはオーディオフィールの声なき声に答えPD-171を送り出し、ベストセラーになった。今日のアナログリバイバルは同社の卓見あって招来されたのである。同社最新の成果がPD-191A。主要部品の支持構造(アンダースラング構造)からインシュレーター

等の機構、モーターのプログラミングまで妥協なくやれることをやりつくして音質の進化を実現した。強固に鍛えられた土台に、サエクと共同開発した高感度型トーンアーム(LTA710)が一体化し、聴き馴染んだディスクから未知の音を引き出してみせる。外見はコンサバティブだが一歩先へ踏み込んだ製品だ。アナログの過去、現在はむろん、未来の可能性までも望見させる。そしてアナログならではの対話する喜び…アナログ最前線の音がここある。(大橋伸太郎)